



南嶺子

二

增
77
2



南山嶺子卷之二

秋齋桂先生著

門人

山中秀蕃
松尾守義 同校

二十

○今の儒者やも、（一）我が大日本の大道と謂ひ、（二）仏者が我が大日本の前聖と任定し、（三）神道者流を石よりぞく、（四）神奈の如実と先ん前聖の道とて、（五）其の禮儀、禮をくして、（六）何の及ぶや、（七）儒者、周公孔子の道よのむとて、（八）学考を歴史文章此の情を用ひ、（九）仏者も、（十）主として釋迦、（十一）弥勒あり、（十二）他を謗、（十三）他とて、（十四）む及ぶや、（十五）近世の神は、（十六）流の中より、（十七）卑とて、（十八）仏を、（十九）難とて、（二十）難とて、（二十一）人の情は、（二十二）情て、（二十三）何の益なきや、（二十四）主として、（二十五）大日本の大古の風を、（二十六）國史格式、（二十七）考く、（二十八）故実よのむ、（二十九）用ひ、（三十）他を、（三十一）顧み、（三十二）よのむ、（三十三）あつ、（三十四）は、（三十五）推ひ、（三十六）て、（三十七）他の教を、（三十八）滅

南山嶺子

卷二

七

とらるるこゝまゝの道のまじりし所より出づる如く

三十三
○新本本と神國とすの國常立尊以来御統見らるる
と叙初天皇氏より地皇氏より又人皇氏より。是は九男二女
あれは御孫と譲りて。御孫も御子と譲りて。禹と譲りて。夏殷周の
三代姓を殊め。秦漢より次第よりかろりて。北狄入て天子と稱すに
至る。是れはあちせんつとま。故大日本天皇氏のみを萬世不易な
るべきものとす。天皇とありしより。萬葉集の天子の御事と推神と
よ。この式令の以大事宣於蕃國使詔書と明神御宇日本
天皇詔書とあり。今日の天子とあり。神とあり。奉ふの文とあり。
如く。物れは神とあり。日本書紀より文徳實錄まで五部の國史

あり。三代實錄に至りて。廿七貞觀十二年二月十五日

告文曰我朝乃神國。憚良社來祀。故實也。貞觀十二年三月

月遣使告於伊勢大神宮。告文曰日本朝。所謂神明之國。秦利

也。是より後の書は神皇の字はしめし。昔ハ神皇といはるる程

みく。斐斐とく知れり。号はれた。倭仙の字もさる。是れは對

してお流す。清和天皇以来神皇といふ号と張るとあり

○神武天皇より後を人代といふ。神代は神皇を稱す。草草不

詳。其の神代の人々のありてある。是よりおハ神代をより後ハ人代を傳

よかざる。日本書紀は太祖國常立尊より。伊弉諾尊

諸君と指して是謂神世七代者也。書れり。俗よは是と天神七代と
 おびく。天照太神より以後と。地神五代と。皇代は古書よかるとりて
 天神地祇といふと各別の事なり古と相違集の序と紀實之うれも
 ちんやぶる神代は古のよどもはごまはし。そのまじりてこのまじり
 たり。人の世とちるとす。このみとちると。まじりてのまじりひとも
 と名つる。昔伊弉諾言すと。神世とて。神代とて。合て。天照太神より
 ハ禮も粗とて。そのは牙めくは。すた人の世とされも。おれた
 瓊々杵と彦火と出ると言。葦草不彥言。三代日向よおとれ。世ハ
 文物は。所質朴の所は。道のきみ。新造て。めて。謀策といふ。ま
 じりて。神武天皇を東に國あつると。知りて。軍勢と。作。大和へ入

むと。のま。朝敵長髓彦が射る。箭よ。天皇の所。兄。五瀬命あこ
 らせ。ひ。を。衆軍機と。まひ。既。敗。んと。す。時。天皇宸襟。神策
 と。た。英氣と。を。ま。あ。す。神武紀。ま。と。り。び。と。り。と。利。り
 といふ。今月の人情と。一。なる。是。より。人代。と。人。情。今。月。よ。所。ま
 世。といふ。事。の。り。王。唐。油。といふ。書。ま。い。る。たり。と。り。の。ま。有。ね。づ。ま
 候。と。う。れ。ま。人。王。代。といふ。ま。と。り。て。五。百。年。前。の。記。文。ま。い。る。づ。ま
 其。後。の。書。ま。い。る。と。り。と。り。

博奕々上古より。の。林。なる。續日本紀文武天皇元年丁酉七月
 乙丑文曰。禁博戲遊手。之後。其。居。停。主人。亦。与。居。同。罪。并。○日本
 紀略第一延喜五年七月廿八日文曰。今日。日。人。言。人。大。野。不。真。配。流。

又捕博戲之輩。○雙六擲蒲と博戲して罪を犯す。捕
 亡令。雜律及天平勝寶六年の官符より。角方と用らる
 らして雙六は屬罪。たゞ延喜彈正式曰雙六者不論高下一切
 禁斷。色は耽もの。利は忘るる。老て改るる。は喪と初る
 利よりして。老のそん。老慾益はのり。やび財を。情楽々利する付
 あり。人利や。あ。財あり。其利を情ふ。意増長して。盜賊をよ
 つるより。かれ。百錢。下の猪。負も。十令。万令の争ひも。其意地一
 ち。ん。を。毒。中。れ。は。毒。魚。と。題。や。河。豚。を。食。一。は。肉。と。食。一。で。
 ち。り。と。擲。蒲。ラ。弄。ト。法。を。忘。れ。筋。を。顧。ぢ。々。獸。肉。と。食。一。で。
 神社。く。じ。う。ろ。ハ。様。悪。甚。一。く。一。親。子。兄。弟。も。も。不。撻。也。云。

な。く。て。ハ。情。楽。の。公。一。は。さ。び。を。よ。り。不。孝。不。弟。の。情。の。原。と。な。り。つ。お
 一。人。倫。の。道。一。を。さ。す。は。至。り。を。ち。り。も。あ。の。人。と。見。せ。盜。賊。の。あ。り。と。知
 る。べ。し。予。が。子。孫。も。一。是。と。好。ま。せ。も。な。り。と。あ。り。も。の。序。一。つ。
 あ。ら。む。予。が。子。の。子。孫。の。あ。ら。び。僧。尼。令。と。名。れ。せ。僧。尼。作。音。樂
 及。博。戲。者。謂。双。六。擲。蒲。之。類。也。百。日。苦。使。基。琴。不。在。制。限。と。の。せ。れ。り。基。琴
 持。要。よ。ら。び。を。さ。す。り。今。の。僧。某。寺。其。院。等。の。法。り。よ。音。樂。と
 有。り。ひ。て。せ。ふ。々。罪。人。と。り。傍。侶。の。あ。ら。び。ひ。ひ。け。あ。り。た。故。大。日。本
 再。任。て。大。日。本。の。お。家。と。名。を。彼。禮。を。蔑。如。よ。ら。の。域。よ。ら。下。
 樂。人。の。り。て。官。寺。の。法。樂。々。古。より。あり。ま。あ。ら。び。僧。侶。れ。よ。び。て
 傍。令。よ。ら。佛。説。よ。其。國。ま。さ。く。其。心。の。た。ま。を。せ。け。り。の

志ありありやい。

○詠大日本の神國といふありあり日本書紀孝德天皇大化元年七月文曰巨勢德大大臣詔於高麗使曰明神御宇日本天皇詔旨天皇所遣之使與高麗神子奉遣之使既往短而將來長是故可以溫和之心相繼而往來而已○續日本紀延暦九年七月在申辨正五位上兼木頭百濟王仁貞卒下所上表曰本系出自百濟國貴須王貴須王者百濟始興第十六世王也夫百濟太祖都慕大王者曰神降靈奄扶餘而開國之孝德天皇の詔旨も高麗神子あり百濟王等の表文も曰神降靈と書しありて知べし漢土の夷狄のほよほとていふ本はのよと神別と秘は唐僧義淨天竺

少く著や西の寄帰傳少も唐のよと始終神別とせり天竺の教を信する僧ぞよもかかふとそは極は況や大日本よりの神もあふおわくも儒者をも侮えし漢土と中みとくやまひ佛者あふ必を粟散と土をいへば大日本の地は信し大日本の五穀と次生命と保禁と侵禮とまふ其甚其故大なるは佛經よ天竺と添浪もをさ大國の振子せられん星辰を以地を量るの程わり義淨三藏渡天してまののりよ五天竺を悉記するよ楊柳の本形とちりてふをそふくも推考べし大日本よ唐より一人大日本の地とあつて深山幽谷まはりの本の有を被るはるの中くはるの年数も六かふよべし唯巡行するまとい事を承るをさつり方便説をふ

實地の瀨とてうごころづ

○教母もあつたといふやうに庸醫も功者ありといふ諺とも思ひ
 一也。や尾張よまう時名古屋より津島へ往て海東郡とあり
 一也。河内手取といふ處よ。藪の中ゆ壺をよめては朱の瓜茄の買
 今よの愛柳と柳を考ねればと懸く瓜茄子よ蓼穂とあり
 加く毎年松月廿五日熱田社の標拂と二月初午日の神供は秋は
 よ秋ど其教も委く記をたれ。安月ののりれを略しねば考ねよといふ
 うるめどころるものも私のおのりハ。艱難の多し。近代の神代考
 流神古のよと記を推しつゝ舊記正史よ本ぢら実と考ふるや
 づい

○義好々神祇官の龜卜の家よられ長明を御祖大社の神家の
 子形也。出家して和らふのこころと風雅の方より希れ。一家の
 酒房も一々ものよべし。其家系より看て。先祖救世の業と名
 する振り。父社の不孝といつては。お人も才智群も秀しんを
 る。よくいふ家の業をうとむ。あつては。おふは分てはいつていふ。
 長明とはしもの傍とて。方丈記もあつてあり。義好と後
 宇多院崩御の時出家とあるを。あつては。伊賀下り格守橋成忠
 よや。その。其は年ものつてなり。成忠の妹中宮小井女密也。
 伊賀と追あつた。そのも成忠の傍あり。又よびをせや。いふ。
 けは。別は菴を建て。お。小井女の通路も送る。時○。又

ここの道もがね。うらわつあこさん。こを志れ。とよみなり。あは海人の
 園太曆めり。とつり。どの上げれ。糸風流の。書なれ。文而。自慢
 あつ。とつ。才と。筋。み。え。多。一。彼書。よ。ひ。つ。後。念。の。海。より。か。り。と。よ
 魚と。出。して。人。こ。を。合。ひ。と。つ。り。と。根。よ。書。り。遊。喜。式。よ。堅。魚。を
 供。所。の。也。萬。葉。集。よ。う。と。初。たい。初。と。よ。み。や。と。食。早。よ。あ。て。び。と。け。や。
 う。つ。り。つ。初。の。う。ら。あ。げ。て。う。ま。う。東。醫。寶。鑑。よ。松。魚。と。の。也。ち。ち。の。の
 び。と。し。ね。書。を。ね。を。び。も。あ。り。ん。予。羨。好。よ。恨。を。し。を。ひ。あ。い。い。ん。也。
 け。書。く。糸。を。と。う。ち。あ。る。書。と。兒。女。の。誤。ら。ん。と。ち。を。以。辨。ぬ。本。寺
 こ。も。い。ろ。く。信。儀。が。還。俗。と。神。人。と。あ。う。を。其。一。流。の。僧。善。と。い。ん。や。
 長。明。の。好。と。神。家。より。祝。ん。と。亦。還。俗。の。儀。を。寺。院。の。徒。の。祝。ん。る。

同義なり

○ 初。め。と。ち。を。ち。や。く。想。案。の。人。あ。が。し。を。さ。さ。り。ね。か。ら。と。さ。う。と。こ。こ
 る。世。の。ま。う。こ。う。か。り。よ。尾。張。の。方。ふ。く。い。ね。う。ら。し。と。祢。と。を。の。ゆ。く
 ち。や。う。か。る。人。ま。さ。ら。ぬ。ね。が。さ。つ。う。と。り。り。あ。う。ね。う。く。い。あ。う。と。の
 い。の。形。と。ち。ふ。う。と。人。の。む。の。よ。あ。る。の。本。末。を。東。西。と。ま。ま。う。法。を。ら。が。
 と。の。を。不。和。と。禿。僧。の。寺。よ。立。春。大。吉。祥。と。く。い。ま。さ。う。と。立。春。大。吉。の
 四字。ハ。裏。より。名。を。も。同。一。の。邪。鬼。う。く。あ。り。て。入。る。の。ゆ。へ。と。い。ん。を。
 ま。い。の。り。よ。あ。べ。一。迷。故。三。界。城。と。は。ま。い。の。て。び。よ。不。定。目。と。お。さ。る。腐
 多。一。不。成。目。を。い。ひ。人。の。實。を。あ。え。な。を。今。日。と。不。成。目。と。て。い。ひ。ま。あ。
 古。書。小。不。成。目。の。り。よ。ん。に。況。や。大。不。成。り。り。日。よ。放。て。と。や。

○世の相者といふ者なり其傳一統の民の是も惑をさるるあり
 きんを開くは禪傍きくこと憑て吉凶を苦樂の癡人論じりか
 くのべりて是も亦巫覡の傳に下。漢土より渡り相書多許を
 凡一の遷遠附書よき人の月なき事あり。説文曰古之神聖人母
 感天而生子春秋元命苞曰女登生子人面龍顏始為天子。史記
 周本紀正義曰帝王世紀曰文王龍顏也。○漢高祖本記も龍
 顔あり。顔の字増句も額角曰顔と註。山の至高なる處と山嶺
 と稱し額を額とせぬ。國語も天威不遠顔咫尺眉目の際
 を顔と稱するは説文よのせり。我れを軍と信ふ所が其じり。
 眉目の際も天子とさるるも相あり。○我龍と飛龍も天と地

の象とさるるも有り。太古よりなまざるあり。○我れを龍とせらるるハ
 天子の相あり。のなまざるあり。今の相者或も人の面と二十六禽も
 けぞうへ虎も似たり。虎の性を以て一はとて虎も似たり。虎の性
 あり。虎を一代あり。説類半猫半虎とて類も猫も虎も是は事と
 猶あり。説向後ののりとも虎もて説あり。又も福壽貪天の四十二相と
 圖なり。ものありて是も考るもあり。塔不替妄談ありてはとも
 あり。○氣さうざれ合ぐ如くは是も。○大日本子相も法別あり。○
 源氏物語相堂もよき。○藤原の相の介もやゆ。○相のつるも
 あり。○是も送理もかあり。○相の介もやゆ。○相のつるも
 あり。○是も送理もかあり。○相の介もやゆ。○相のつるも

その見たりけり子細かたげば明雲其のまゝやいふくぬあまふも
 天台のたゞしくいふとあふかたげなるの始なり明は日月ありて
 とのりよ雲あれを光とさへれぬひん信西相しやれぬ。亦家お終
 小見へり。天智天皇元年四月。鼠産於馬尾。いづるもあやと道野といふ
 傍ふ占せぬ。北國の人まゝに南國は汝んぬ。其の兆なり。言麻破はく
 日本よ属んて占り。鼠と小方のふぬ馬と南方の羊まじりて
 占らるものにて。さればても其まけぬなり。八分の占者相志と八珠あるを
 ○聖德太子と家大日本小佛法と弘く小始なり。世よいなる子と
 南岳と惠思禪師の再せたり。伊宋言儒傳。儒傳編あり。其の
 思禪師傳國王をり。伊宋史まじり。隋の時日本國用吹王

の子雲中と飛り。前けの法華經を取ゆ。南岳の後身なる也を
 載り續高僧傳。唐の玄宗の時。其の真和尚よ或人問て。南岳
 惠思禪師。再世傳。伊宋史まじり。有やといひし。其の
 少くも伊宋史まじり。禪師の入室なり。降誕の事。佛祖統紀と
 日本書紀を合と看ぶ。聖法を講あり。神皇正統紀よ出れり。
 北島大納言の々の誤なり。今集解よ謚号なる事。伊宋史
 ○遊女の事。既よ漢有遊女と詩經よりいひ。亦大日本。其の古來なり。
 其の事。今のごく市中。邑里あり。其のハ多く。船のやう。其の
 群して。旅客を慰は。む。ハ口。其の法。其の法。其の法。其の法。
 三善為康所録。朝野群載。伊宋史まじり。遊女の記一篇あり。其の文を

のそ其世の古をるとまのり○身山城國與度津浮巨川西行一日謂
之河陽仕及山陽南海東海三道之者莫不傳北道江河南北村
邑處々分流向河内國謂之江口蓋與藥寮味原牧掃部寮犬庭
莊也到提津國有神崎蟹島等地比門連戶人家無絕倡女成
群棹扁舟着旅船以席枕席聲過漢雲韻飄水風經迴之人莫
不忘家列盧浪尤釣竊高宮舳舻相連殆如無水蓋天下第一之
樂地也江口則觀音為祖中君小馬白女主殿蟹島則宮城為宗
如貴香爐孔雀之牧神崎則河菰姬為長者孤獲宮子乃命小
兒之屬皆是俱尸羅之再說衣通姬之後身也上自卿相下及黎
庶莫不接林第施慈愛又為人妻妾歿身被寵雖賢人君子亦

不免此行百則住吉西則廣田以之為祈禱壁之處殊事白大夫伯祖
神之一名也人別刻之數及百千能蕩人心亦去風而已長保年中東二條
院恭詣住吉社天王寺此時禪定大相國被寵小觀音長元年中東門
院又有御幸此時宇治大相國被賞中君延久年中後二條院同幸
此寺社狗犬憶等之類並舟而來人謂神化近代之勝事也相傳
日雲客風人為賞遊女自京洛向河陽之時愛江口人刺史以下
自西國入河之輩愛神崎人自以始見為事之故也下文長
の遊女くく貴族の寵もありはれたるは旅泊のちびりのものなり
後世の體と其殊なり記もあつてつる名もあつたなり西の
のゆゑこれより住吉の善賢を産まぬ江口を地名とす

と其好女の名をくべ一大江以言の見遊女詩序一篇本朝文粹
第九はくももずき同いりね好色のものをくゆを愛と好のなま
近きんやの語あり。好女と昔より老をまで肩と描りまや。今案
案よりよりものしく眉雲のいさげいをくも老よりくねごと
眉つらゆき泰の宮中は好く八字眉を漢の文帝の尚は起りけれ
より青黛眉。愁眉啼粧等の眉のつら方ねきりり事物紀原とま
とくあり。頼朝卿の時志水冠者と遊女別當とされに東鑑のせ
新田義貞の臣越前守は今頃の城はあり一附院寺の神とい好女を
好よのそと宮の仲はなりまれ粧を奉ねたまるが如く。傾城と
号ふものしくもるの後の事とてくあり。

○傀儡々木偶戯なりと註して今より人形舞あり。され史記殷本紀
正義より土木為人封象於人形也と昔より人形もよぶなり。猿子
和歌の題は傀儡とてくものより好女のものに傀儡を好女と
や。とて人形舞の事なるをよむ。好女は好女のものに好女とて思ふ
みおけは西宮より人形舞の世をめぐり好女の人形を第一とて
つよおはせより好女とて見たり。

○予少ア一附神明憑託とら書二事と著叔父のくけり。坂田幸因
系はたやとて。日近幸の神学考の或はを關人として其志を
叱りたるよあされ。競角の情書のれもてよあせり。字句を
おのづか負きく。これ才も富む。負も負く。負も富む。才も才も。

古今の俗なり。古の財の字扁亭と名備する人を稀なり。古の字
 んぐりよはゆきようしく一けしと諺んるおあつめり。古書と讀んで樂む
 一人と競争なり。以て窮の窮を求ふにやちるべし。古温集
 和容字と好。醫は長し。有馬温泉の道は強う。今かんと。予も亦も
 貧しく。伊はゆき。笑し。字向は。疑と。海と。癡や。叔父の嘉
 言はひ。出さる。あつぬ。近世の神字。老諺。諺多し。といふ人。

五代

○寛永十年八月三日朔の如。永樂通寶といふ錢と多く積まぬ。
 是より慶長より多し。二百年餘。永樂錢直貴く。他の錢と要錢と
 号して。年々。永永西後。の撰。天文九年相模國北條家より
 下知して。永永後。の如。八月。下。の伊。ち。比。八。如。是。も。多。し。い。よ。う。て

他。涉。々。と。考。へ。り。國。の。法。心。を。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と
 他。涉。々。と。考。へ。り。國。の。法。心。を。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と
 月。日。永。樂。涉。々。と。考。へ。り。國。の。法。心。を。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と
 其。後。寛。永。三。年。寛。永。通。寶。の。錢。と。行。き。一。より。後。は。通。紀。と。考。へ。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と
 天。野。氏。塩。さ。り。と。い。ふ。書。の。も。り。彼。書。お。よ。そ。百。卷。よ。り。杜。撰。の。り。を。考。へ。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と
 あり。あ。い。れ。ど。世。の。さ。を。考。へ。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と
 して。博。達。好。事。の。一。人。の。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と

六代

○古。来。と。考。へ。り。國。の。法。心。を。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と
 寺。佛。殿。與。塔。間。別。除。鼻。髮。被。著。紫。波。衣。と。考。へ。り。よ。ひ。し。豊。臣。家。の。時。又。永。永。後。と
 皇子とて。東宮の時。天智天皇の疑ひと散らんとて。別除鼻髮とありて。

ひかくと訓より。因果経曰過去請佛為成就無上菩提故捨飾好利
鬘髮髮下略云。惣々今世の僧信を售んあやうく長髪をのぎて。髪を
僧具つり下俗髻とせしむ。頼政の軀れ。徳より。并の定ぬお
のぎて。髪を鬘とせしむ。類もそのかよ入ぬとせり。

七田

○戸令をえらふの男子を十五以上女子を十三以上をぬ。婚儀を
ぬり。昔吾日本古法にて異邦の定と別あり。上古を始より女の男
の好よりくのみくを。だしの媒介をせし後。女の方男はうて。婚
れをその後。くまをぬくもぬせり。故は舊記古式は婿入の式
とぬ。び。婿取とい作法と多くとせり。○江口次郎卷二十章
取次とせり。と曰。聲公來。中畧。入中門。登自寢殿。腋階水取入下

階執事。件。水。鬘。姑。相。共。懷。臥。之。多。婿。の。足。の。は。う。根。よ。と。女。の。父

母甚履とせり。とて。女の。と。聲。方。より。と。ぬ。あり。胎。息。より。方。より
途。よ。也。胎。息。火。と。ひ。く。よ。合。せ。り。夜。所。の。燈。を。ぬ。く。一。三。日。消。さ。り
等。の。灰。実。を。く。り。ど。は。は。の。焚。上。の。か。き。を。あ。ら。せ。ひ。合。ん。べ。し。
と。と。ひ。女。の。方。より。盃。と。く。し。亭。を。方。を。ぬ。く。古。れ。も。所。傳。あ
る。り。胎。息。中。古。以。後。と。よ。入。と。て。初。より。夫。の。方。一。ゆ。と。盃。古。例
の。り。て。女。より。く。し。り。より。て。吳。後。と。ぬ。く。よ。ぬ。ぬ。舊。に。よ。り
と。と。が。あ。る。べ。し。

八田

○び。と。ま。と。ぬ。り。肉。女。と。髪。と。結。び。ま。と。ら。ら。き。り。髪。あ
げ。と。ぬ。く。伊。勢。ゆ。徳。よ。井。筒。の。女。と。業。平。の。ひ。と。き。る。や。よ。

うろたうらうらけ髪も有むね君をうらむとてんかめくきけむ
 まともかぶる萬葉集十六古詩一首作者未詳して橋本寺の長
 屋よりの糸うらむいゆるり髪よつらんうらむも定むるまおめ
 んうらのえあり。元恭天皇七年紀曰皇后聞之恨曰毒初自結髪
 陪於後宮既經多年。是も結髪之二字を以入内のみりしめり
 文選古詩 一種子卿結髪為夫妻。李善曰結髪始成人也。し髪ハ
 いまも髪を結ぶるうらむうらむ。

九

○淮南子 主術篇小審於電鑿之計者必遺天地之數不失
 小物之選者惑於大事之舉猶狸之不可使搏虎牛之不可使捕
 鼠とて之誠は宜あむれ大行の功あるごと人と細事よく小事

よ心ある人を用ゆるて其つらあつて武遂ふ志はむと人よ
 秤量とちり飾あさめいさてい。影人とて月よつて一髪一毫と
 わさふ高貴とてしむ政とてせむい小鮮とてさふ。度くあせう
 てたせしむる如く。民人其細密をまらうべし。以て主君方人の
 其の臣と使は。虎も虎の仔を命し。猫も猫の仔とてさす。やうて
 あじ各其職其任よありて。政其處をゆべし。虎も虎と捕はと命し。
 鳥も水へをせしめはるらう。虎も鼠とゆとねらう。不足の情常
 小愠く鳥も心こよらう。弱のまねぬくは後よお忍みの
 さらうもああり。学者々学問よつて知ありて。利をさるるん。多く
 貧乏よらう。善と以後世のゆらゆらと。唯の類は初よらうて

其の學問を好む眼より見るが如く。學者ありて利なきは富くも
乃あり。論議家よりいへり。

十三

○孔子家語に。與善人居如入芝蘭之室久而不聞其香即與之化
矣。との語あり。此れをわくするも。平日の交友を選ばざるは。じつとあれ
ば。くさばれぬやう。一(夜盜博奕の流は交をうた。あれは。潔
かれぬの害ありんとして。不正の友も交わらぬ。人の五六年もまてを
その詞をくちぢの常道。まは。勝負は天はゆせて。奇巧はまをぬ。道
めとまじく。ずんば。れを。や。人の。博奕。といふもの。もある。の。教ありと。あ
く。う。て。え。勝。を。ね。も。一。う。く。ば。り。ぬ。れ。を。う。て。ん。と。思。ひ。清。く。大。博
奕。を。ま。く。と。古。き。ゆ。ま。ち。つ。て。う。り。自。然。と。な。れ。や。ま。は。こ。れ。を。ぬ。る。也。盜。博。奕

と。知。て。な。ら。う。と。人。を。う。け。ま。た。博。奕。の。人。ま。ま。ど。る。も。あ。る。べ。し。
一。清。二。潔。も。ふ。を。万。金。も。回。理。を。り。ぢ。う。ら。と。好。人。を。盜。賊。と。あ。り。ど
ゆ。よ。ん。て。交。と。絶。べ。し。況。や。學。問。を。ん。と。思。ふ。人。は。い。ち。ぬ。れ。ぬ。學。問。を。々
決。して。成。就。と。ぬ。の。ゆ。ゆ。行。く。と。な。る。人。も。その。流。と。う。ら。を。教。べ。う
ら。び。教。て。も。益。な。ら。う。べ。し。

一

○呂氏春秋の意と。攝で日人として。たは。迷。惑。や。し。ひ。う。ら。必。如。の
お。れ。こ。の。の。ち。り。玉。と。つ。う。人。を。ま。は。し。ぬ。り。を。ま。す。し。ひ。ぢ。り。あ。げ。て。玉
よ。あ。ら。ち。ぬ。の。功。と。し。ま。し。ま。と。愛。ふ。勝。主。と。い。た。は。博。奕。の。し。て
辨。り。物。理。を。通。達。せ。し。め。て。察。々。た。も。た。ま。と。愛。ふ。ま。れ。ゆ。ゆ
を。立。主。々。智。ある。ふ。似。せ。ぬ。の。長。く。忠。臣。は。あ。ら。う。の。所。う。あ。ら。う。

其他ちよゆまの葉と短くして信を信ざる人慮を加ふ所
なりとぞかくの如くち一呂氏不常も亦他ちものとし秦王を惑
せしむ可ら

○仲丘紫の朱と奪とてゆくは色一紫のふりきり他ちもの此の
るあね今この紫とていあつる今この紫と紫根とふねとてなしてそ
しゆい古今わち葉も。しよその根もね衣もやるあつ。古の
紫と葉根とをいしてはゆぐあをねあつてはうぬあつとあつ
色もて朱も似ちよう奪の語あり。仁山金氏葉と聞也とありと
いふ朱註より或淵の向色と註して論語大全よのせり。子よ
わとて信も階より紫を朝服とせり。葉根の紫なり。延喜或よ

凡てつる紫のちち方ゆくを。あよ東山た大臣實野公の名目録
紫端の量のちと赤端世俗之此事状と註あり。後世女服の
りよとあ成に紫草はゆめんも。葉根條のむらゆも色くも
まごうらうくあも。葉根はああびもゆもあもまよのちとあ
んや。紫の字もとあよりゆら字も紫葉よりゆら字もああ。鄭聲
の雅樂はまひてととや。利口の忠言はゆ。邦家とみる。似て真
ちうとととあ。しよあ。びや。今の律は若くあ。中臣後とあ。肩あ
ゆふたささくをゆて。葉根はあ。ゆをゆ。或と又根清津後と。
は。か。經のは師功德品の聞香の段。圓覺經の清淨部とれ合を
と。他ちち文とて思神の似ちゆ。ゆも多。紫の朱と奪より

附々大和を以音聲の中和をゆりほりて之のてよををり大和を
 むめてみ。倭歌とてふ。鄙土のちを訛るより甲斐支那のち
 をし書まのりひのせり。之の訛るをわらうる天余於波はあり。
 てよをい漢入めてい焉哉乎也の助勢とてるべ。置まがさるる
 を置るるよよをい。其又よとてこれらとてよををたて。河
 ぞのちの人々自らしきてよをを善く訛らぬ。水のさざりてを
 せぬるあり。その子細々大和より山嶽のちを遷るる後いば
 人の子。大日本國の正音とて。今のちわを遷て訛る。訛るの
 ことよもせし訛るる水のことよあはれ。京々大日本六十四國及二島
 のちの都會の地ちる。諸土の人の音聲和合してゆぐのみ自ら

其中といふ。一國一邑とて他土の人もあはれた。ゆりありて
 ちる。後よおるる。その必浪の音ちる。平聲よかより入聲よか
 ちよ。諸土の人の入るる。ちる。ちる。平安城々桓武
 天皇の以後ちる。千年のちる。法の音聲合熟。い
 ちる。都舎二百年以上よおる。又ちの如くちる。南京官の
 異國よて。荆南をん。都舎の地ちる。漢土の諸國の
 正音の國よ。水よ。い。

○書經の堯の徳とあはれ。平章百姓ありて。註よ百姓百官と百
 官の人よ。種々の姓氏あり。古の百姓と土民の稱あり。土
 土民々黎民庶人の号あり。古の稱あり。今自らと。

五

殊ちるる多し。今と以古と説。古を以今を釋ハルより類ルのる。以を
 誤ヒるるサカふナだニ古コ今イマ人ヒト情シヨウのノ知チるル方カタもノ也ヤ。利リと色シキ在シ
 の。

殊ちるる多し。今と以古と説。古を以今を釋より類のる。以を
 誤るるサふだに古今人情の知る方も也。利と色と在
 の。



